

ペーター＝ミヒャエル・リーム教授の音楽教育講座

～ルドルフ・シュタイナーの視点から～

高久理恵

はじめに

「皆さんそれぞれが自分に一番ピッタリだと思う音をハミングしてみてください。」会場に不思議なハーモニーが広がる。「ではその音をハミングしながら他の人の音に耳を傾けて他の人の音に合わせてみてください。」しばらく混沌とした音が漂うが、やがて吸寄せられる様にひとつの音に落ち着いた。「では、その音から4度上がって…」「今度は下がって…」「次は5度上がって…また5度下がって…」ひとつになった音はリーム氏の指示する通りに動く。そのようにして導かれた音は440ヘルツのA(ラ)に近い音だった。

こんな風にペーター＝ミヒャエル・リーム氏の音楽講座は始まった。氏はドイツ、カールスルーエ国立音楽大学でピアノ及び音楽教育学を専攻、作曲をO.メシアンらに師事、チュービンゲンのヴァルドルフ自由学校(シュタイナー学校)音楽教諭、シュツットガルトのヴァルドルフ自由学校教員養成ゼミナール教官を経て1992年からカールスルーエ国立音大の作曲・音楽理論の教授、シュツットガルト市最優秀作曲賞受賞という経歴の持ち主である。2001年8月22日23日の2日にわたって行われた講座はルドルフ・シュタイナーの音楽教育観を楚とした音楽教育に関するものと、同じくシュタイナーの音楽史観に基づいた作品の解釈・分析に関するものがあったが、今回は音楽教育に関するものを取り上げることにする。

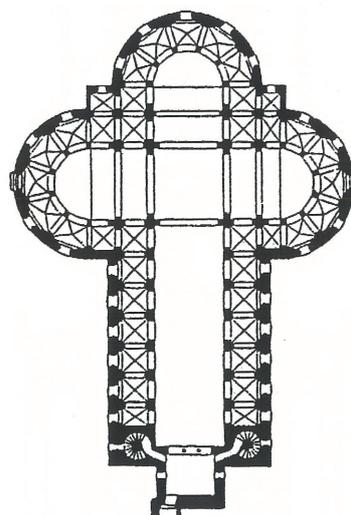
7才から9才までの子供を対象に

『5度の雰囲気』の音楽をとおして豊かな感情を育てると題された講座は7才から9才の子供にはどのような

音楽が、その成長を助けるのに最もふさわしいか、という点から論じられた。

人間の成長は、生まれてから7才ごろまでは肉体を作り上げることにエネルギーが注がれる。それを人類の歴史に重ねて、西洋の建築史に照らしあわせると心の成長が体の成長とどういう関係を持っていたのかを知ることができる。(シュタイナーは人間を肉体・生命体・感受体・自我からなるものと考え、それぞれが建築・彫刻・絵画・音楽と関係するものと説いた¹⁾。)7才から9才ぐらいの子供はロマネスク様式の建築物に対応させることができる。ロマネスク様式は10世紀頃から11世紀頃にかけてみられるが、ふたつの要素から成る。それは神や天上的なものを象徴する半円と、床の形にみられ

図1 ロマネスク様式の例(平面)



ザンクト・マリーエンハイム・イム・カピトール聖堂
1065年献堂 12～13世紀に改築 ドイツ・ケルン

図2 ロマネスク様式の例（外観）

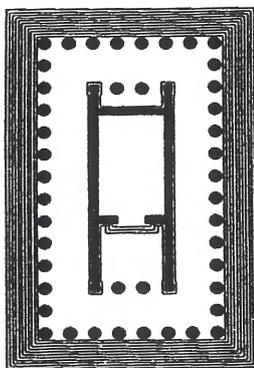


聖アポステルン教会堂 1200年頃 ドイツ・ケルン

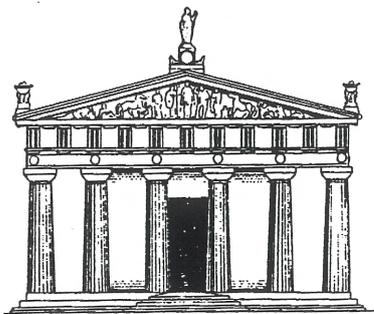
る人間的なものの象徴である正方形である。(図1)また、天井の形は上部がかまぼこ型のドームで人がそこに立った時に神に囲まれているように感じる事ができる。(図2) 神殿に人間が入れるようになったのはこの時代からであるが、それは人間が自分の肉体を意識する体験と同じであると言う。

ここで紀元前11世紀から紀元前4世紀末頃までの古代

図3



ギリシア神殿の平面形式



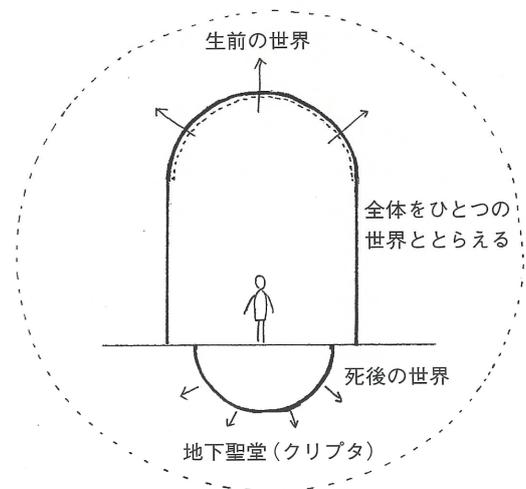
ギリシア神殿の立面 前600年頃

ギリシャ建築をみてみよう。(図3)

この様にこの時代の建築様式は神殿を囲んで建っている柱が外に開かれている。これは、3才ぐらいまでの子供にみられる『自我を自分の外に感じている状態』に重ねてみる事ができる。

この後、リーム氏は今回の訪日で初めて法隆寺を訪れた感想を次のように話した。法隆寺は建物の回りに廊下がめぐらされ、中心のまわりを回る構造になっているのでギリシャの神殿に似ていると感じた。しかし、その屋根はちょうど ロマネスクの教会の裏返しの曲線のように感じられた。そこに神との直接的な結びつきを感じ、記憶以前の自分、思い出せないくらい昔の自分を見つけたような感じを受けた。私が今こうして話していることは西洋の考え方なのでこれをそのまま東洋の考え方にあてはめるには無理があるかもしれない。

話はロマネスク様式に戻る。はじめに平面の様子をみたが次に上下の様子を見てみよう。



ドーム型の天井には空などの絵が描かれ、天井を作っている石を克服して人はそこに宇宙をみようとした。また、上の空間は人の生まれる前の世界でありその場に立つことは、自分がそこへやって来た体験をすることになる。地下には地下祭室(クリプタ)があり死後の世界と結びつく。これら上下両方の世界をひとつのものと捉えていたこの様式は、子供が自分自身の体を感じとっていくプロセスに重ねることができる。また、ロマネスク様

式の建物の柱と、天井の会おう部分に魔物の彫刻がみられるが、7才から9才の子供は、自分の持つ良いものも悪いものも、さらけ出す事ができ、(例えば12才になると自分の思う事全部は言えなくなる。)地上的な所へ落ちて行く時期、思春期に向かう時期であるという様子に重ねてみることもできる。ロマネスクの教会は母親のようであり、ドームのなかを通過して中に入るとほの暗く守られている感じがする。

この様に子供が自分自身の体を意識し、感じとっていくプロセスは呼吸によって見ることもできる。吸うことは自分の中に入ってくる事であり、吐くことは自分の外に出ていく事である。また、それらをメルヘンの世界で描くこともできる。「むかしむかし あるところに……」で始まるお話は子供の意識を過去に向かって開き、お話を聞き終えた子供は「もしあの時こうなっていたら…」とか、「もしあの狼が死んでいなかったら…」というように考えることによって、その意識を未来に向かって開くことになる。善悪、明暗、のコントラストを時間的なものに置きかえてみるとそこに、緩急、長短など音楽で表現できるものにも、つながりを感じることができる。

7才の子供の本来の姿は、外の世界に対して全幅の信頼をよせ、中心から出会った人に向かって開いていくものであるから、まず子供との信頼関係を作り出すことから始めることを忘れないように。(氏はここで最近の子供の様子について、とても憂慮すべき状態にあると言いそれぞれの年齢のあるべき姿をしていない子供がふえていることが、教育界が危機状態にあることと無関係ではないことを心配そうに語った。)

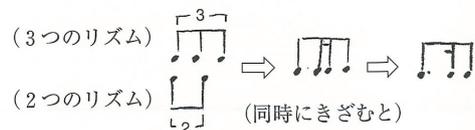
では、この全てが外にむかって開かれているような年齢の子供にはどのような音楽が相応しいのか。氏は、自分に翼が生えているかの様に、空を飛ぶ天使の様に、拍を感じる事がなく漂うが如くにメロディが動く音楽が望ましいと言って次のような旋律を口ずさんだ。



この旋律の始めとおわりの部分は意識が目覚めていて、

その間の部分は自分に向かっての途上にいる。また、A(ラ)の音から始まって漂った音が5度下がってD(レ)の音に落ち着くが、これは「人間よ、地上での基音を探しなさい。」という意味を持つ。と言うのは、人間が生まれたときにあげる産声はこの地上に生まれた喜びと、それまでいた天上的な世界を失った悲しみの声であるから…。

また、この年齢の子供の、呼吸の長さの比は、平常時で吸う時が2、吐く時が3で 走ったりすると1対7くらいまで広がる。この2対3という比率は、振動数の比でみると、5度音程にあたり、リズムで1つの拍を3つに分けて感じる時と2つに分けて感じる時を表すと



となる。2拍子のみで始めることは、地上的な部分のみを強調する事になり、3拍子だけの音楽にすると、地上との結びつきが無くなってしまう。2のリズムは、自分が自分の中に入っていくことを、3のリズムは自分が外に出て行くことを強調する。これは、2拍子系のポルカ(パートナーと一緒に平行移動する)の動きや、3拍子系のワルツ(回る、曲線を描く)の動きにも見ることができる。(この後、リーム氏はこの年齢の子供に相応しくない音楽の例を数曲あげ、子供が替え歌を作ってしまうような曲は、歌詞が子供の呼吸にきちんと対応していない場合が多いと指摘した。)そして、7才から9才までの子供にふさわしい曲の例として、自作を2曲披露してくれた。

Morgenlied

Text: Hedwig Diestel
Melodie: P. M. Riehm



朝のうた

わたしは みたよ
 おひさまが大地をうでにだきしめて のぼるところを
 人の瞳のなかで 咲き誇る花たちの表面で
 再びおひさまが 光り輝くのを わたしは みたよ

Es plaudert der Bach

Text: Marijane Garff
 Melodie: F. M. Riehm



小川はおしゃべり

小川はおしゃべりする 岩がどうやってできたのか
 石のテーブルについて 鳥や魚について
 太陽や星について 花や種について
 おしゃべりしているよ
 誰が静かに耳を澄ましているでしょう
 そこでどんなおしゃべりが聞こえるでしょう

9才以上の子供を対象に

2日目の講座は、9才以上の子供を対象にしたもので「自我意識が目覚めてから出会う音楽と音楽体験」と題されていた。始まりは昨日と同じようにハミングから。9才までの子供と、彼らに相応しい音楽がどのようなものだったかを簡単に振り返ったあと、9才ごろに現れる子供の変化について考察することから始まった。

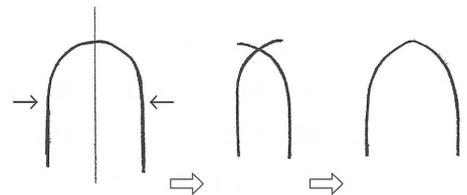
9才ごろになると、子供にはみんなと同じことでなく、「自分だけのしたい事をやりたい」と言う欲求がでてくる。例えば、教室で先生の語るお話を、みんなで聞いている時…ほとんどの子供がその世界に入り込んでいる時に、誰かひとり窓の外に何かを投げたりする。当然すべては台無し。しかし、教師はここでこの子供の行動が、何を意味するかを考えなくてはならない。この行動に隠れたメッセージ、—自分たちはもう3年生だ。胆汁質のぼくに気がつかないのか。自分に必要なのは、メルヘンではなくてアクションドラマだ。—に気づかなくてはならない。(シュタイナーは人間の性質を四つの気質にわけて捉

えた。明るく活発、社交的だが熱しやすく冷めやすいのが欠点の多血質。責任感、正義感が強いが、協調性に欠ける胆汁質。空想好き、慎重で誠実だが、外への関心が稀薄な粘液質。記憶力や集中力に優れるが、物事を深刻に考えすぎる帰来のある憂鬱質²⁾。)

このように、子供達はその個性に応じてそれぞれ成長してゆく。本当に色々な子供がいるが、その個々の気質に対しての対応が必要である。それまで子供に与えられていた楽器は、リコーダーやペンタトニック(五音音階)に調律されたライヤー(抱えて演奏できるくらいの小さなハープ)だったが、憂鬱質の子供にはヴァイオリン、粘液質にはチェロ、胆汁質の子にはトランペットといった具合にそれぞれの子供に相応しい楽器を加えていく事が必要になってくる。ただし、子供の気質はどれか一つで成り立っているものではなく、四つの気質が様々な割合で混ざり合っているのだから、それを正しく見分けるのは大変難しい。間違える事もしばしばだ。間違ったと思えば捉え方を変えればよい。子供のほうでも自分に合う楽器を見分ける能力が育ちつつあるので最後には、それぞれに相応しい楽器が見つかるものである。

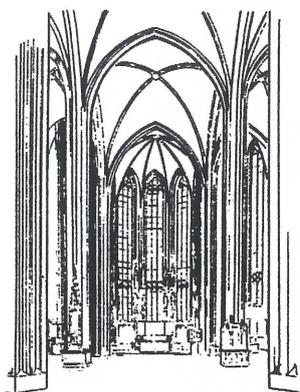
さて、この時期を建築様式でみるとどうなるか。ロマネスクのドームを縦の線で真半分に切り、(切ることで新しい様式、時代が始まる。)自分の中に引き込まれる力が強くなると、ゴシックのシンボルとなる。(図4)円がふたつに分かれることから生じるこの形はお互いがぶつかりあうことを意味する。このゴシック様式に、ひとりの人間として問うようになることをはじめる9才頃の子供の様子を重ねて見る事ができる。

図4



また、まっすぐ上に向かってのびた柱、高い天井、(図5)外壁に現れる彫刻、地下聖堂がなくなり外への動きを持った沢山の開口部、建物を外から支える壁など

図5 ゴシック様式の例 (内部)

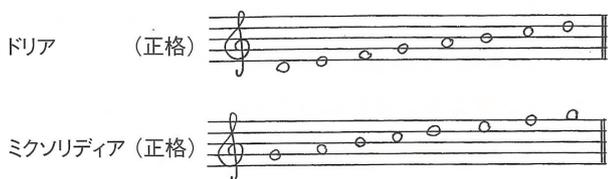


マリア・ツール・ヴィーゼ聖堂 1400年頃

の特徴は、長すぎる体、足はつま先立ち、思考の力を使って自分の内から外へ向かおうとするエネルギー、まっすぐに立とうとせず片足に体重をのせて立つ様子など、9才ごろから思春期にかけて見られる子供の様子と重ねて見ることができる。そこには、疑問をもちながら座っている子供がいる。それまで、呼吸に自分の体を感じていた子供も、脈拍に自分を感じるようになり、内的にも分離しはじめ、人間の一生の意識が生まれてから死ぬまでに限定されるようになる。

これらの事をふまえた上でどのような音楽がふさわしいかを考えると、リズムのあるもの、詩とメロディが分離したもの、声部の違うもの(対立するもの)などの特徴をそなえた音楽になる。また、特に3年生の終わりごろには、教会旋法を使った音楽がふさわしい。というのは、9才児はたそがれどきにいるからだ。ドリア旋法は短調に近い響きをもち、ミクソリディア旋法は長調に近い響きを持つ。

教会旋法の例



では、調性のはっきりした音楽はいつ頃から?それは子供をよく観ているとわかる。例えば、朝起こす時気...

低学年の子供はなかなか目覚めることができなくてボンヤリした時間が長い、5・6年生にもなればパッと目覚めるようになる。長調・短調は明・晴であり昼・夜に対応するものである。また、子供自身が調性のはっきりした音楽を体験したがるようになるものだ。

ここでリーム氏は楽譜について触れ、子供の描いた絵を紹介した。2年生の子供が、ある歌を聴き、その歌についてのお話を聞き、絵にかいたもの。(お姫様が馬に乗っている。地面の線に楽譜の原型が見える。)3年生の描いたものには、ネウマ譜のようなものがある。5年生で現在の楽譜とほぼ同じものが描かれていた。(ここで紹介されたものは、ヴァルドルフ自由学校で一環した教育を受けている子供達のものであることを理解しておく事が必要³⁾。)そして、2年生の終わりごろから3年生の初めに相応しい音楽としてドリア旋法を用いた“Kleine Flote am Morgen”、3年生の終わり頃に適したものとしてフリギア旋法で書かれた“Baibong”(この曲は、難しそうであるが、子供の内面にびったりくるものだと子供は歌うことができる。5年生にはこの曲を歌うことはできない)、6年生に適した曲の例として“Es tagt”の3曲を紹介した。また、“Kleine Flote am Morgen”の伴奏にはDとA(レとラ)の5度を弾くだけで充分だが、“Es tagt”の伴奏には和声をきちんとつけるようにという指摘があった。(何れも氏の作曲したもの)

Kleine Flote am Morgen



朝の小さなフルート

朝の小さなフルート お前は太陽の仲間
 雲の彼方のあんなに高い所からやって来て
 私を連れて行く そして雲の彼方の高みで
 教えてくれる そこが晴れ渡っていることを

夜が明ける

夜が明ける 朝の太陽が光り輝き
 生けるもの皆 起こす
 小鳥は うれしそうに コラールを歌って
 光のシュプールに挨拶をする
 また そこら中を 歓声をあげて歌い
 森や野原の目を覚ます

Baibong

1. Ba - ia - bong, ba - ia - bong - die Wie - gen - waa - ge wiegt den
 2. Ba - ia - bong, ba - ia - bong - die Schüt - tel - stun - de schluckt den

Reis und wiegt dich auch. Sin - gend wiegt die Bam - bus - tra - ge an der
 Schat - ten, wen - det ihn. Die - ses Mit - tags ste - te Run - de reibt die

Sei - dan - schnur der Ta - ge - ba - ia - bong, ba - ia - bong - wiegt sie dir dein
 hei - ße Schul - ter - wun - de - ba - ia - bong,

Le - ben auf - ba - ia - bong - ich - bin, ich bin!

P. M. Riehm '79

天秤棒

てんびんぼう てんびんぼう
 秤のゆりかご お米がゆらゆら お前もゆらゆら
 ひなが一日 歌いながら 絹の紐のついた
 竹の担ぎ棒でゆらゆら ゆらす
 てんびんぼう てんびんぼう
 お前の命が収穫物と釣り合って揺れるよ (1番のみ)

Es tagt

Weise, Satz und Text: Werner Gneist (*1898)

Es tagt, der Son - ne Mor - gen - strahl weckt al - le Kre - a -
 tur. Der Vö - gel fro - her Früh - cho - ral be -
 grüßt des Licht - tes Spur. Es singt und ju - belt.
 ü - ber - all, er - wacht sind Wald und Flur.

最後にリーム氏はピアノについて、あまり早くから弾かせるべきではないと述べ（ピアノは産業革命以降に発展した楽器だという理由で）少しずつ段階を踏んで教えたほうが良いことを強調した。そして、「子供は誠実さを感じ取りたいとねがっている。子供に向かい合っていきたいのなら子供を持ち上げるのではなく、体を低くしてかがみなさい。子供の頭と同じ高さになって物事を見つめ、考えなさい。」という言葉で講座を閉じた。

講座をきき終えて

以前からシュタイナーの教育に対する考え方には、大変興味があり、書物などで触れる機会があったが、実際にヴァルドルフ自由学校で教鞭を取ったミヒャエル・リーム氏の講座は楽しく興味深いものであったのと同時に、教育に携わるにあたって、人間の成長についての認識が、通り一遍のものでは役に立たない事を改めて強く意識させられた。ヴァルドルフ自由学校では1年生から12年生までの、子供の成長にあわせたカリキュラムにそって授業が進められるが、特に1年生から8年生までは、一人の担任が8年間を通してひとつのクラスを受持ち、低学年の間は「音楽」の独立した授業はない⁴⁾。にもかかわらず、どの授業も音楽的であり、芸術的である。音楽に満たされた授業を通して子供達のなかに「強い意志」「豊かな感情」「自由な思考」を育てようとするシュタイナー教育。そこでの音楽の働きを目にする時、人間にとっての音楽の在り方に思いを廻らさずにはられない。

アジアの東の端に住む私達のまわりには、様々な音楽があふれ、意識的にも無意識的にもそれらを常に耳にする。リーム氏が講座のはじめに忠告した様に、この内容を鵜呑みにすることなく、これからの取り組みに生かしていきたい。

参考

- 1) 「音楽の本質と人間の音体験」
ルドルフ・シュタイナー／西川隆範 訳 イザラ書房 1993
 - 2) 「心で感じる幸せな子育て」
藤村亜紀 (株)ほんの木 2001
 - 3) 「自由への教育」(日本語版) 国際ヴァルドルフ学校連盟
高橋 巖 高橋弘子 訳 フレーベル館 1992
 - 4) 「シュタイナー教育を考える」
子安美智子 学陽書房 1983
- 図1 「西洋建築様式史」
熊倉洋介 末永航 羽生修二 星和彦 堀内正昭 渡辺道治
美術出版社 1995
- 図2 図3 図5
「ビジュアル版 西洋建築史 デザインとスタイル」
長尾重武 星和彦 編著 石川清 小林克弘 末永航
関和明 羽生修二 渡辺道治 共著 丸善 H11年第4刷

カールスルーエ国立音楽大学
ペーター＝ミヒャエル・リーム教授
音楽特別講座 in 大阪
2001年8月22日・23日
大阪府立文化情報センター・さいかくホール